

ま な び や

学びを支える「技」と「モノ」

石盤・石筆から大学ノート・鉛筆

江戸から明治前半
毛筆から石盤へ

日本で用いられる主な筆記具は、江戸時代まで毛筆でした。寺子屋では、紙は高価なので何回も重ね書きしたり、水で書いたりしていました。明治時代に近代的な学校制度が整備される際、多くの子どもが一斉に学ぶ形式が導入



石盤（スレート）と石筆（ろう石）



最初の大学ノートは東大前の松屋製 1844(明治17)年

明治後半から鉛筆
とノートの普及へ

そこで、子ども用の筆記具として登場したのが石盤（石板）でした。半紙の大きさの石である石盤に、「石筆」という蠟石を筆にしたもので文字を書きます。つまり、手元にある小さな黒板であり、何度でも消して書き直すことができます。「学制」が出された一八七二(明治5)年の「小学教則」には、石盤を使った指導が掲載されています。

学校で学習用に紙が使えようになつたのは、和紙より大量生産に向く洋紙が安価に製造できるようになった一九〇〇(明治30年代後半)年頃からでした。鉛筆と洋紙の学習帳「ノート」という組み合わせが、価格の低下とともに徐々に広まっていきます。

なお、ノートの製造・販売は、東京帝国大学(現東京大学)前に合った文具店が始めたようです。これに由来して、大学生が用いないノートも「大学ノート」と呼ばれていました。日常生活においても明治末期から大正初期にかけて、毛筆からペンや鉛筆への転換が進みました。

【鉛筆の種類】

鉛筆の芯は、黒鉛と粘土の割合によって、硬いものから軟らかいものまであり、例えばHBは黒鉛約70%に対して、粘土約30%。黒鉛の量が多いほど濃く軟らかい芯に、また粘土の量が多いほど薄く硬い芯になります。JIS規格では芯の硬度は6Bから9Hまで17種類あり、硬い芯はハードの頭文字Hを使い、やわらかい芯はブラックの頭文

字Bで表されます。HとHBの間にFがありますが、これはファーム(ひきしまったの頭文字を使っています。学校で使う鉛筆といえばHBが主流だった頃もありましたが、最近では子どもの筆圧が弱くなり2BやBなど濃くて軟らかい鉛筆の方が書きやすく推奨されています。

また、消しゴムの使い方に

硬度と用途の早見表

資料：日本筆記具工業会	Hard ↑	硬い		
			9H~7H	非常に硬い芯で紙以外に金属や石材などに筆記するために用いられることもあります。
			6H~5H	芯が硬いので減りが少なく太くならないので精密な製図設計用に適しています。
			4H~3H	精密製図設計用ですが、硬い芯を好む場合は一般筆記に使用する場合もあります。
			2H~H	一般製図設計用として使用されますが細かい文字や薄い筆跡を好む方は一般筆記にも使用します。
			F~HB	最も一般筆記用に使用されます。
			B	一般筆記にも使用されますがやや芯がやわらかく筆圧の強い学童にも適しています。
			2B~3B	濃くやわらかいので滑らかに書けて、疲れずにスムーズな筆記ができます。長時間の筆記に向いています。
			4B~5B	デッサンなどの画材に向いています。
			6B	筆記に強弱を持たせることで濃淡を出すことができます。
			8B	デッサンなどに使用され、描いた後にこすってぼかしなどをつけることができます。
	Black ↓	やわらかい		



▼期日 2月22日(土)
①10:00 ②14:00 各10名
▼対象 小学生から大人
▼参加費 無料 ※要申込み
※申込開始2月1日9:00
詳細はHPで(58)2250

【特別展】関連イベント
ガリ版アートのチャレンジ
ーエコバッグにオリジナルプリントー

●時間
①10:00
②11:00
③14:00
④15:00
【各20分】

●期日 1月4日・5日・11日・12日・13日(祝)

DVD映画上映会
《年中行事》

慣れない低学年では、消しやすさも重要なポイント。硬い芯のものを使っていると、消しゴムで消そうとした時に力が入って、うっかり紙を破ってしまった...という事態になりかねません。